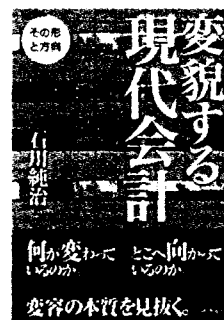


変貌する現代会計

石川純治 著

(四六判・228頁・定価1,680円(税込), 日本評論社刊)

評者=武田隆二 ■愛知工業大学客員教授



現在、会計は大きくその姿を変えるに至った。本書は、かかる「会計の変容」の姿を、単に「制度」の解説としてではなく、その背後にあるものを絶えず見詰めながら、「何が変わったのか」、会計はこれから「どこへ向かっているのか」、その「変容の本質」を追求した物語である。

さまざまな領域の人々から、これほどまで「会計が注目されるようになった」時代はこれまでになかっただけに、「会計アカデミズムのいわば『学問力』と『責任』が試される」時代となったといえる。そのような問題意識をもって、本書の構成を組み立て、しかも文章は極めて平易に、分かりやすく問題点に迫っていく書き方になっている点で、著者の「専門力」と「編集力」を感じさせる。

論文調ではなく、学生が先生に知りたいことや疑問点を「質問」の形式で問いかけると、先生がそのことについてやさしく「答える」形で進められている点も、難しい問題を解題するにふさわしい行き方となっている。そのようにして、複雑かつ広範な問題領域が、部分的な形としてではなく、トータルとして「現代の会計がよく見えてくる」ように描き出されている。

変貌する会計の全領域を、著者は次の5つのテーマにまとめて提示する。

- ・テーマⅠ 新たな会計基準と「企業会計原則」
- ・テーマⅡ 全体の捉え方
- ・テーマⅢ 変容の形と方向
- ・テーマⅣ 新たな会計秩序を求めて
- ・テーマⅤ トライアングル体制の変容

最初に、企業会計がどのように変わったかという「変容」の起点を企業会計原則におき、「目にみえるもの」を「目に見えないもの」から捉えるという行き方で、具体例を示しながら読者の理解を深めていく解説手法がとられていることは好ましい。

最近「気づき」が大変重要だといわれるが、会計の現状を普段考えも及ばなかった切り口で物事を眺めることで、「気づき」を与えてくれる。そんな作品である。

進んで、会計の重要課題である資本維持と利益計算についても、明快な解説を行っている。

特徴的なことは、具体的な事例について説明を行い、それぞれの要所に至ると、キーワードを用いて図式化することでまとめを行っている。

例えば、「変容の形と方向」に触れて、著者は「グローバル資本市場の投資家→企業価値の評価→有用な会計情報の提供→会計基準のグローバル化」という図式をもって特徴付け、このような会計基準のあり方を「企業価値評価適合アプローチ」と名付けている。読者はこのような整理に出会ったとき、本書のナレーションの中に、理論の息吹きを強く感じ取ることができるひとこまとなるのではなかろうか。

また、「情報開示が利益を生むか」という表現も面白いが、「記録なくして情報あり」というようなキャッチ・フレーズも、読者を引きつける力を持っている。

他にテーマとして、「財務会計の概念フレームワーク」を取り上げ、また、現代会計の形質を形づくってきた「トライアングル体制の変容」を話題として取り上げるなど、現代会計を理解するに当たっては是非とも知っておかなければならない事柄が、著者ならではの筆致ですきっと仕上げられている。

一般的に、著者の培われた論理的思考に歴史的観察の重要性を織り込んだ記述内容となっており、過去を見詰め、現在を捉え、そして将来を展望するという形で論が進められている。

会計ビッグバン以降の輻輳した現代会計の変容の姿を経済的背景の変化を含めた形で知りたいと思う読者に対して、お薦めできる良書である。

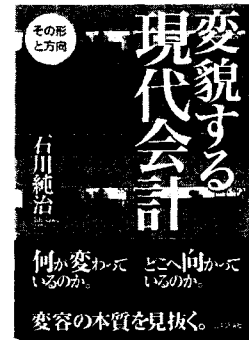


石川 純治著

変貌する現代会計— その形と方向

(日本評論社／本体1,600円＋税)

早稲田大学教授 辻山 栄子



未曾有の金融危機のもと、時価会計の広範囲な凍結を求める声が噴出している。はたして時価会計は、現代会計にどのような功罪をもたらしたのか。そもそも時価会計を含む現代会計は、伝統的な会計とは異なるパラダイムにシフトしたのか、それとも依然伝統的な会計と同一のパラダイムの延長線上に位置しているのか。

本書は、非常にコンパクトな書物でありながら、現代の会計に携わる者の誰もが日常的に感じているこれらの疑問に、真正面から取り組んでいる意欲作である。

本書は11章で構成されているが、全体が7章からなる「理論編」と、4章からなる「制度編」に大別されている。読者は前半の理論編で、『目に見えるもの』を『目に見えないもの』から捉える、という視点が大切です。という筆者の言葉に後押しされて、「レベル1（個々の会計ルール）」の背後にある「レベル2（会計の原則＝プリンシプル）」を理解し、さらにはそのプリンシプルの基底にある「レベル3（基本思考）」に思いを馳せながら、現代会計を読み解く鍵を発見することになる。そして後半の制度編に進む頃には、現代会計を眺望する読者自身の視点を身につけていることになるだろう。

本書の真価は、本書を直接手に取ることに

よってしか味わえないだろうが、以下では、本書に示されている「変貌する現代会計」の形と方向の一端を、本書に即して紹介してみよう。

◇静態論から動態論へ

現代の会計を理解する第一歩は、半世紀にわたって日本の企業会計制度を支えてきた「企業会計原則」の基礎にある「動態論」の考え方を正確に理解することである。そこにこそ現代の会計の変容を考える際の原点ないし起点があるというのが、筆者の一貫した主張である。

では、動態論とは何か。それを理解する近道は、動態論における「資産」の概念と、動態論以前の考え方であった静態論における資産概念とを対比してみることである。静態論における資産は、我々が日常生活において「財産」として捉えているような個別に譲渡できるもの、つまり今処分してお金に換えられるものを意味する。しかし動態論における資産は、それとは本質的に異なる概念である。資産は、企業に投下された「費用のかたまり（プール）」であり、その一部は固定資産の減価償却のようにその効果が発現する期間の収益に対応させて毎期の費用に算入され、残りが将来の資産として繰り越されていく。この考え方の出発点にあるのは収支計算であり、資産とは費用（原価）の未償却残高であるから、

費用というフローが先に決まり、その結果として資産というストックが後で決まることになる。

このように、近代会計の根底にあった動態論の核心を、収支計算→その配分→資産は支出の未償却残高の繰越額という関係で理解することにより、動態論思考における貸借対照表の意味を正確に理解することができる。

◇変容を読み解く3つの見方

このような動態論との関係からみると、「公正価値会計に代表される現代会計の変容」はどのように理解することが可能であろうか。それは、動態論の延長線上にあるのだろうか。結論から言うと、筆者の答えはノーである。

筆者によれば、動態論との関係からみた現代会計の捉え方には次の3つがあるという。それらは、(1)動態論を保持しつつそこにおける基礎概念を拡張して捉える「拡張の論理」、(2)今日的なストック評価による利益計算を動態論と「補完」の関係にあるとみる「補完の論理」、(3)実物経済を基礎にする実物資産と金融・証券経済を基礎にする金融資産とをそれぞれ別枠として捉える「区別の論理」である。

これらの3つの見方のうち、筆者は第3の区別の論理によってこそ現代会計の変容をトータルに説明できるという。そのような結論を導くために、筆者は具体的な基準(先のレベル1)のなかで金融商品会計と退職給付会計を取り上げて検討を加え、たとえば、現行の退職給付会計における会計処理では、費用計上(フロー配分)→負債計上(ストック評価)という動態論における基本的な思考が逆転していることを指摘し、それは動態論とは別の論理から導かれているとしている。

本書は、各所に思考の伏線が縦横に張り巡らされていて、推論が立体的に組み立てられている。しかも問題の設定から結論に至る理論展開には非常に抑制が利いていて、決して筆者の見解を押し付けるようなところがない。そのような筆者の寛容に甘えて、ここでは敢えて一つだけ評者の疑問を投げかけておきたい。

筆者は、変貌する現代会計の姿を正しく捉えるためには歴史的な俯瞰が重要であるとし、歴史の文脈のなかで静態論から動態論への転換を導いたモメントは産業資本主義であり、動態論から次の会計モデルへの転換を促している現代のモメントは投資家資本主義であると指摘している。一方で、筆者は本書の最後を次のようにも結んでいる。「今日の企業会計の特徴は、…『記録なければ計算なし』の会計に対し、『記録なくして情報あり』の会計になってきているといえます。先に、複式簿記の“不要不在”といましたが、そのような性格になってきているといえますね。」

そうすると、産業資本主義の台頭前から実務に広く浸透していた複式簿記と、動態論以前の静態論との結びつきは、はたしてどのように説明することができるのだろうか。歴史を超えて通底する会計の原点は「記録」にある。しかもその記録とは、決算記録ではなく取引記録つまりフローの記録にある。そこにこそ会計の本質があるとすれば、今もこれからも、そして動態論以前も、会計の「形」と「方向」は動態論の拡張の論理の中にこそあると評者はみている。筆者とは、いずれこの点を議論できる機会があることを願っている。

ともあれ本書を読み終わって、近來まれな上質な書物に巡り合えたと思えた。読者諸氏も、必ず豊かな読後感を味わえるに違いない。